

# サークル活動を通じて 「環境」と向き合う学生たち



番外編

「大学サークル訪問」では、これまで7回にわたって各大学の活動を取り上げてきた。「環境」というテーマは同じでも、サークルによって取り組みや考え方はさまざま。そこで今回は趣向を変え、6大学のサークル代表者に集まっていただき、活動に対するそれぞれの思いを語ってもらった。

## ● あの手この手で勧誘活動を展開

学生たちに集まっていたのは4月下旬で、新生生の勧誘活動もひと段落し、皆ほっと一息といった様子。そこで、サークル勧誘について話を向けたところ、参加者からはさまざまな声が聞かれた。

「新生勧誘の時期になると、キャンパス内は投げ捨てられたサークルの勧誘ビラで山のようになります。私たちのサークルではゴミ問題に取り組む姿勢を新生にアピールするために、メンバーがお揃いのロゴ入りTシャツを着て、散乱するビラを拾い集める活動を今年初めて行いました」と早稲田大学学生環境NPO『環境ロドリゲス』の内田友紀さん。

「地球君」というオリジナルキャラクターの着ぐるみをまとい、新生勧誘を行ったのが獨協大学『Deco』。代表を務める丸武志さんもアフロヘアのカツラをかぶり、勧誘活動やゴミ拾いに汗を流した。丸さんいわく「環境活動というと、どこか堅苦しい印象を持たれがち。もっと身近で楽しいものだとすることを伝えたいと思ったんです」。

東京大学『環境三四郎』も「環境に関心のない学生をいかに多く取り込むか」をテーマに、新人勧誘を行ったサークルのひとつ。「活動実績ばかりを強調する従来の勧誘スタイルを改め、もっと気軽なイメージを持ってもらえるように努めました」と話す佐野史明さん。その結果、例年以上に多くの新生が

サークル説明会に足を運んだそうだが、「実際に入部したメンバーはそれほど多くありませんでした。来年はアフロにチャレンジしてみようかな」と苦笑する。

各サークルが、あの手この手で勧誘活動を展開する一方、環境に強い問題意識を持ち、自らサークルの門を叩く新生もいる。「環境活動に真剣に取り組みたい」「仲間とエンジョイすることを優先したい」というように、サークル活動に対する考え方に温度差がある中で、参加者からは「サークル内の調和をどう図っていけばいいか悩んでいる」という意見も。サークル内をひとつにまとめる努力はしているものの、活動に物足りなさを感じ、サークルを離れる部員もいるのが現実のようだ。

## ● 学生ならではの 自由な発想で活動を展開

大学の環境サークルに対しては、「キャンパス内のゴミ拾いなど、学内中心の取り組みばかりでは何の広がりもない」として、“活動の限界”を指摘する声も一部で聞かれる。今回集まったメンバーたちは、この点についてどう考えているのだろうか。

「活動の成果ばかりを先に求められてしまうと、学生らしい発想や考え方が失われ、おのずと活動に限界が生じてしまうと思うんです」と『Deco』の丸さんは、そんな周囲の見方に対して疑問を投げ掛ける。



早稲田大学学生環境NPO  
『環境ロドリゲス』  
▶ <http://rodo.jp/>

副幹事長  
早稲田大学2年・内田友紀さん

「以前から環境に強い関心を持っていたものの、大学では専門的に学ぶ機会がありませんでした。この知的欲求をどこで満たそうかと悩んでいた時に、『ロドリゲス』を発見したんです。現在、キャンパスや地域の環境改善活動の他、学生による環境企業家を生み出すための学生環境ビジネスコンテスト「em-Factory」の企画・運営に携わる。



『Deco』  
▶ <http://www.geocities.co.jp/NatureLand/3091/index.html>

代表  
獨協大学3年・丸武志さん

「もともと環境活動に興味はありませんでしたが、フィリピンへ旅行に行った際、ゴミの山を見て驚くと同時に、『日本からもゴミがたくさん来る』と現地の人に聞かされショックを受けました。環境について意識するようになったのはそれからですね。今後の主な活動として、ゴミ拾いの他、フェアトレードにも積極的に取り組む考え。

『キャンパス・エコロジーフォーラム』

▶ <http://hcef.b7m.net/>

緑化班リーダー  
法政大学3年・谷口圭さん

「緑の保全活動に携わりたいという長年の夢を実現するために、大学屋上の緑化プロジェクトを自ら立ち上げました」。今年3月には念願だった屋上緑化が完成。「屋上緑化は維持管理のほうが大変。ISOの『継続的改善』という言葉にもあるように、完成がゴールではなく、大学と共同で維持活動をさらに盛り上げていきたい」。



「学生としてのメリットは、専門知識がない分、かえって自由な発想で活動できること。自分たちの活動に関して、特に限界は感じていません。むしろ学生のほうが、企業よりも高いポテンシャルを持っているのでは」と上智大学『アングルス』の岩城志紀さん。「僕ら学生が日常的な視点で環境を捉え、悩みながら活動を続けることによって、より現実味のある環境対策が生まれる可能性もないとは言えないと思います」。

もちろん、学生たちがサークル活動に対し、まったく疑問を感じていないわけではない。『環境三四郎』の佐野さんは、「自分たちの活動が自己満足の領域から出ていないのではないかと悩むことも少なくないと言う。「自分たちの活動が本当に社会の役に立っているのか。ひょっとしたら自己満足を追求しているだけではないか」。その狭間に揺れる学生も多い中、「僕は自己満足であってもそれでいいと思うんです」と法政大学『キャンパス・エコロジーフォーラム』の谷口圭さん。

「環境活動といっても、所詮は学生が行うもの。社会の役に立っているかどうかを考えるよりも、まず自分たちができることにチャレンジすることに大きな意味があるのかなって。活動によって学内の環境が少しずつ良くなっているのも事実ですし、こうした目に見える成果を実感できて、僕は素直にうれしいですね。僕たちの取り組みが、やがては社会に認められ、広まっていけばそれでいいと割り切って考えています」（谷口さん）

『環境三四郎』

▶ <http://www.sanshiro.ne.jp/>

広報担当  
東京大学2年・佐野史明さん

「『環境三四郎』で環境問題の勉強をしたいという一心で受験勉強に打ち込みました。活動を通して出会う人々には、いつも刺激されています」。『環境三四郎』のメインプロジェクトのひとつ、テーマ講義「環境の世紀」の企画・運営に携わるほか、昨年の学園祭ではフェアトレードを取り上げ、貧困と環境問題について考える試みも。

環境NGO全国青年環境連盟

『エコ・リーグ』

▶ <http://el.eco-2000.net/>

全国事務局長  
千葉大学4年・原田紘子さん

「活動に取り組むきっかけは、大学2年の時に『エコ・リーグ』に所属する友人から活動の話聞いたこと。生き生きとした表情で活動するメンバーを見て、ここならやりがいを感じられるのではないかと思いました」。昨年の第2回全国大学生環境活動コンテストでは代表を務め、大会の企画運営に汗を流す。



「環境に対して、何もしなければ何も変わらない。まず、自分たちの足下(あしもと)から変えていこう」というのが、参加メンバーたちに共通する思い。『環境ロドリゲス』の内田さんは、サークル活動の成果のひとつとして、周囲の意識の変化を挙げる。

「自分が環境活動をしていることで、周りの友人たちが自然にゴミ分別などをするようになったんです。また、環境に対するサークルメンバーの意識や行動にも変化が見て取れます。これって確かに小さなことかもしれないけれど、環境を良くするためには一人ひとりの意識付けが大切な要素であることを考えれば、確かな成果だと感じています」(内田さん)

最後に将来、環境に関わった仕事をしていきたいかどうかを尋ねたところ、参加メンバーたちからは「何らかの形で関わっていければいいと思っている」という意見があった一方で、「そこまで深くは考えていない」といった声も。ただ、「仲間と協力して同じ目標を達成できた時の喜び、活動を通じての出会いなど、サークルでの経験が役立つ場面はきっとあるはず」と参加メンバーたちは一様に口を揃える。

「少なくとも環境という同じテーマに関心を持ち、一緒にがんばろうとする仲間ができたことは、私にとってかけがえのない財産。この先大きな自信にもつながるだろうと思います」。参加者を代表して『エコ・リーグ』の原田紘子さんは、最後にこう話してくれた。

『アングルス』

▶ <http://angles.hp.infoseek.co.jp/>

代表  
上智大学3年・岩城志紀さん

「自分自身や周囲の人たちの生活を変える力になりたいという思いがあった、そのひとつの切り口が環境だったんです」。「肩ひじ張らず、日常的な視点で環境テーマを捉える」をモットーに、ミニ文化祭でのリターナブル食器の導入やゴミ分別、学内の環境情報誌の編集など、身近な活動をメインに取り組んでいる。

